



联合国
粮食及
农业组织

FOOD AND
AGRICULTURE
ORGANIZATION
OF THE
UNITED NATIONS

ORGANISATION
DES NATIONS
UNIES POUR
L'ALIMENTATION
ET L'AGRICULTURE

ORGANIZACION
DE LAS NACIONES
UNIDAS PARA
LA AGRICULTURA
Y LA ALIMENTACION

منظمة
الغذية
والزراعة
للأمم
المتحدة

Liaison Office in Japan

5F Yokohama International Organizations Center, Pacifico-Yokohama,
1-1-1, Minato Mirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012, Japan

Tel. (045) 222-1101
Facsimile: (045) 222-1103
E-Mail Address: FAO-LOJA@FAO.ORG

F A O (国際連合食糧農業機関) 日本事務所
2010年10月26日

LOJAPR10/30-No. 179

プレスリリース

生物多様性: 使うか失うか

FAOが第二回食料・農業のための世界植物遺伝資源白書を発表

2010年10月26日、ローマ-我々が栽培し食する植物と、それらの「野生の近縁種」の遺伝的多様性は、特に開発途上国において、保全のみでなく利用を進めるための特別な努力が強化されない限り、永遠に失われ、将来の食料安全保障を脅かす可能性がある。

これがFAOにより26日発表された第二回食料・農業のための世界植物遺伝資源白書の主要なメッセージの一つである。

報告書は350ページで、遺伝子銀行による収集から作物多様性における気候変動の影響までのすべてを網羅しており、食料および農業作物の生物多様性を保護するために何がなされているかに関する信頼のおける診断である。

生物多様性の喪失は、世界の最も貧しい人々に最も影響を与え、人類が将来全体で90億となる2050年に自らを養うという能力に重要な影響を与える。

気候変動

特定の作物品種に含まれる遺伝子情報は、気候変動に直面し食料不安と闘うため、熱波、干ばつ、塩分、病虫害および疾病に抵抗性があり、成長が早く、高収量の新品種を開発するために不可欠である。

「植物多様性の持続可能な利用の増加は、農業における遺伝資源のリスクに取り組むための主要な鍵となりうる」とディウフ事務局長は述べた。

「熱、干ばつ、塩害、洪水や害虫への耐性の遺伝的秘宝の鍵を握るので何千という作物の野生の近縁種を依然収集、研究、記録する必要がある。」

作物単収増の50%が近年新しい種子で可能となった。残りの50%は、灌漑と肥料による。最近の優良事例としては成熟の早いNERICA米(New Rice for Africa)がアフリカの複数の地域で現地経済に変化をもたらしたことが知られている。

野生の近縁種

特に農家の農場レベルで、既存の遺伝子多様性を保全し、利用するために地元の関心を喚起し、能力向上を計るためにより多くのことがなされなければならない。

最初に食料・農業のための世界植物遺伝資源白書が発行されてから12年が経過し、この間に世界の食料情勢は劇的に変化した。

飢餓はいくつかの国で減少したが、他の国で増加した。燃料と食料価格は顕著に増加した。グローバルイゼーションが深化しながら広がり、いくつかの国で安い輸入食料が地元の多様性の豊かさを脅かした。

報告書は、生物多様性の喪失を数量化しようと試みているわけではないが、経験的証拠は前世紀を生き延びた伝統的食料作物の多様性が減少し、作物の生物多様性の喪失が続くことを示している。

FAOは、1900年から2000年の間に75%の作物多様性が失われたと推測している。食料・農業のための世界植物遺伝資源白書で強調されている最近の研究によれば、気候変動により、ピーナッツ、ジャガイモおよび豆類などの重要食料作物の野生近縁種の22%までが、2055年までに消滅する。

遺伝子銀行が成長する

より肯定的な面としては、報告書は過去12年間に食料作物の遺伝的多様性を保護し、利用することの重要性に対する認識が高まっていると述べている。遺伝子銀行は規模と数の双方で増加している。

現在約 1,750 の遺伝子銀行が世界にあり、そのうち約130がそれぞれ1万以上の種子を保管している。2008年には、ノルウェーにスバルバルト・グローバル種子貯蔵所が世界の作物多様性の究極の備えとして設立された。

世界で保存されている全体740万サンプルのうち、各国政府の遺伝子銀行は約660万を保存するが、このうち45%は、1996年には12カ国で保存されていたが、今は、7カ国でしか保存されていない。

このように収集され保存されている遺伝子多様性の数カ国および研究所への集中の傾向は、FAOの食料農業植物遺伝資源条約により提供されているような、入手促進の確保のためのメカニズムの重要性を強調するものである。

条約は現在125カ国に批准されており、貧しい農家が多様な遺伝作物種を保全するための補償の枠組みを定めている。

投資の軽視

報告書によれば、1980年以來の農業への投資の軽視は、特に途上国においてインセンティブを欠いた若者が直接的により利益のあがる活動に従事することにつながり、植物育種家を含む優秀な農業科学者の不足を招いた。

生物学と情報技術においては、過去12年間に大きな進歩が見られた。その成果は、食料安全保障の向上を究極の目標とした農業生物多様性の利用の促進に使われるべきである。

優良種子が再生産され、検証され、流通する多くの種子制度、市場又はメカニズムも壊れてしまった。先進国では、種子部門は十分採算が合い、事業として可能である。

残念ながら、貧しい国では公共機関が優良種子や新しい種子へのアクセスを全ての農家にいきわたらせるのに苦労しており、先進国でのようにはいかない。

報告書によれば、食料作物における遺伝資源のより広範でよい利用は保存を促進する。しかし、公的部門と他の関係者を通じて、新しい種子が農家に行き渡るようにするには、適切なシステムの導入が必要である。

国際連合は2010年を国際生物多様性年と定めた。

英文URL: <http://www.fao.org/news/story/en/item/46803/icode/>